

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.241



2-3

February - March 2021

芝祐靖が見つめた 雅楽の今昔

特集

02



02 今昔雅楽集 三、千代の楽人

04 オルガン・レクチャーコンサートVol.2「廣江教授の謎解きファイル『タイトルの秘密』」

06 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

Photo: 田澤純, 伶楽舎

芝祐靖が見つめた雅楽の今昔

「ショウトラシオン」、「ショウトラシオン」、「ショウトラシオン」
三返唱えると素晴らしい音楽が響き渡り…

文・宮田まゆみ(伶楽舎)

〈招杜羅紫苑〉。3月13日に水戸芸術館で皆さまにお聴きいただく芝祐靖作品のひとつ、第二部で演奏される組曲のタイトルです。七曲から成る大きなこの組曲は1980年に「十二音会」の委嘱により作曲され、その後私たち伶楽舎も何回も演奏させていただいています。

「招杜羅大将」は薬師如来を守る十二体の勇ましい武将たち「十二神将」の中の一役です。薬師如来を本尊とする全国各地の寺に、まさに薬師如来像を守るような配置で安置されていますが、その中でも奈良・新薬師寺の、国宝にもなっている等身大の大迫力の像たちがよく知られています。日本最古の十二神将像だそうです。



奈良にルーツをお持ちの芝祐靖先生はお寺の散策や仏像の拝観などが好きだったと伺っています。管絃のための即興組曲作曲の折に、第三曲目に「招杜羅大将」を取り上げられ、その仏像が淡紫色に彩られていたので「招杜羅」とむらさき色を表す「紫苑」を繋げて「招杜羅紫苑」とし、それを組曲全体のタイトルにもなさせたとのことです。

曲が誕生した1980年、自分のことで恐縮ですが、私は雅楽を習い出して2年経つか経たないかという頃でした。「招杜羅紫苑」という作品のタイトルを初めて耳にした時、「ショウトラシオン」

という音だけが印象深く耳に残り、それは「ショウトラ・シオン」ではなく「ショウト・ラシオン」と聞こえ、耳慣れない異国の言葉のような印象で、まるで何かのおまじないのように響きました。新薬師寺の十二神将は学生時代に拝観していたのですが、十二体それぞれのお名前は知りませんでした。それで、組曲が始まると素晴らしい音楽が流れてくるのですから、「ショウト・ラシオン」という言葉は耳を離れず、曲名の由来を伺ったあとでも、何年も、私の中では三回唱えると美しい音楽が響く呪文のことばとなっていました。

芝作品には素敵なタイトルがいくつも見出せます。

〈巾零輪説〉という曲も美しい名前です。「輪説」は箏の華やかな自由奏法。「巾」は箏で一番高い音を出す絃の名前で、その澄んだ高音から生まれる朝露の「零」が木の葉からしたり「幹を濡らして岩にしみ、やがてせせらぎとなって川にそそぎ、海に至る(芝祐靖)」という設定のとても美しい曲です。

「輪説」という名前は2016年に国立劇場50周年記念演奏会で十二音会によって初演された〈雉門松濤楽〉の第三章〈玉手輪説〉にも見られます。ご自身の解説を読みますと「玉手」は「箏を奏でる女性の手を指します」とのこと。国立劇場は宮城の南西にあり、城の南門を「雉門」といい、石垣の松林と濤を吹く風を「松濤」として、平安時代の管絃の遊びで箏を奏でる女性たちとその華やかな奏法に想いを馳せる。なんとも美しいタイトルです。

2008年に作曲された〈舞風神〉という曲があります。この作品はニュー

ヨークと福島を拠点として数々の意義ある音楽祭を展開している「ミュージック・フロム・ジャパン」の35周年のお祝いのために新作されました。「風神」は天空を駆ける風の神。三十三間堂の、今にもつかみかかりそうな「風神・雷神像」がよく知られています。「舞風神」の曲も、エネルギーに満ちた風神の舞を思わせます。エネルギーに満ちた活動を続ける「ミュージック・フロム・ジャパン」にぴったりの曲ですが、そのタイトルを「Music From Japan」の頭文字「M・F・J」とをとって「Mai・Fu・Jin」となされたのがついた時、びっくり仰天、名付けの素晴らしいに圧倒されました。

2019年7月に芝祐靖先生が他界されてから1年半経ちますが、芝作品の演奏の機会はますます増え、そのたびに新しい発見をし、大きく豊かな音楽に感動を新たにしています。皆さまに芝祐靖作品を大いに楽しんでいただけるよう、一同稽古に励みます。



●プロフィール

宮田まゆみ(みやた まゆみ)
笙を国際的に広めた第一人者。古典雅楽はもとより、現代音楽、オーケストラとの共演などにより、笙の多彩な可能性を積極的に追求している。紫綬褒章受章。国立音楽大学招聘教授。伶楽舎音楽監督。

雅楽はゴジラの夢を見たか?

文・篠田大基



芝祐靖 Photo:田淵勝彦

3月13日の「今昔雅楽集 三」では、戦後の雅楽界を牽引した演奏家であり、作曲家でもあった、芝祐靖氏(1935～2019/伶楽舎創立者・初代音楽監督)の作品を特集します。この演奏会で取り上げる氏の代表作のひとつが、管絃のための即興組曲〈招杜羅紫苑〉です。その表題曲の第三曲〈招杜羅紫苑〉を、私が初めて聴いたのは、2018年6月末、東京での伶楽舎の演奏会でした。雲海のような笙の響きのなかから、少しずつ形を現わして加速する箏の旋律。そこに管楽器も加わり、3+2+3拍子の旋律が速いテンポで繰り返されます。古典雅楽にはないテンポの変化、変拍子、スピード感。荘重な雅楽のイメージを覆すクールで颯爽とした音楽でした。演奏会が終わっても、その旋律が私の頭を離れず、この曲が大好きになりました。

芝祐靖氏はこの作品の解説で、薬師如来を護る十二神将の名前を「まるでテレビに出てくる怪獣のよう」と書いて、くびら 毘羅大将、ばさら 伐折羅大将、あにら 頗羅大将を、グビラ、バキラ、ガニラと茶化

しています(CD『招杜羅紫苑』ブックレット)。十二神将の一体、しょうら 招杜羅大将を表題にしたこの曲も、もしかすると怪獣のイメージだったのかもしれません。

ふと気がつきました。変拍子、旋律の反復、怪獣といえば……。もしや〈招杜羅紫苑〉のモデルは、伊福部昭作曲のゴジラの、あのテーマ!? 4+5拍子の執拗な繰り返しです。ゴジラと異なるのは、雅楽にはオーケストラと違って低音楽器がないために軽やかな響きになること。その爽快なサウンドは、伊福部作品より、むしろミニマル・ミュージックを連想させるかもしれません。〈招杜羅紫苑〉を聴くと、こうした同時代の音楽が作品のなかにこだましているように、私には思えました。

〈招杜羅紫苑〉の組曲全体は、曼陀羅を表す古典雅楽風の第一曲〈序奏と曼陀羅〉で始まり、途中には現代的なサウンドや楽器の特殊奏法が取り込まれたり(第三曲〈招杜羅紫苑〉、第五曲〈遊ぶ飛天〉)、はたまた古代シルクロードを思わせるエキゾチックな旋律が出現したり(第四曲〈間奏と迦樓羅の面〉、そして音楽は、最後の第七曲〈怒り持国天と終曲〉で再び古典雅楽の世界へと帰ってゆく……という、古いものと新しいものが混然となった、まさに「曼陀羅」のような音楽です。

芝祐靖氏がこの曲を作曲したきっかけは、武満徹が作曲した雅楽〈秋庭歌〉(水戸芸術館の「今昔雅楽集 一」でも上演)にあったそうです。1973年に〈秋庭歌〉初演に参加して以来、芝氏はこの曲に惚れ込み、西洋音楽の作曲家が作った雅楽〈秋庭歌〉に対して、雅楽人の自分は何ができるのかと問い続け、そして〈秋庭歌〉に拮抗する作品を作る

うと決心したと語っています。第4曲前半の「寺院の庭を表す」という〈間奏〉は、武満徹の〈秋庭歌〉へのオマージュではないでしょうか。続く第4曲後半の〈迦樓羅の面〉には、箏・二管が互いに離れた位置で演奏するようにという指示があり、〈秋庭歌〉で用いられたエコーの効果を思わせます。

また、大箏と鉄絃箏という、現在の雅楽では使われないシルクロード起源の古代楽器が用いられている点も特筆すべきでしょう。古代の音楽に対する芝氏の関心きんしんは、この作品以後、奈良時代の芸能「伎楽」の復元(その音楽は「今昔雅楽集 二」で演奏)、失われた雅楽曲〈曹娘禪脱〉(「今昔雅楽集 一」で演奏)や敦煌琵琶譜の音楽(今回演奏)などの復曲へと発展していきました。

雅楽1000年の縮図のような、そして作曲家・芝祐靖氏の業績の集約でもあるような音楽。〈招杜羅紫苑〉を、3月13日、雅楽の古典や再現された古代敦煌の音楽とともに、どうぞお楽しみください。

■公演情報

今昔雅楽集 三、千代の楽人

2021.3.13(土)
17:00(16:45プレトーク)
【全席指定】一般¥3,500、
U-25(25歳以下)¥1,000

●プログラム

芝祐靖 復曲:〈拾翠楽一具〉
芝祐靖 復曲:復元正倉院楽器のための敦煌琵琶譜による音楽 から
〈急胡相問〉、〈傾壺楽〉、〈急曲子〉
芝祐靖:管絃のための即興組曲〈招杜羅紫苑〉

●出演 伶楽舎

伶楽舎による「入門 初めての雅楽」を3月初旬からオンライン配信します。3/31まで、500円。詳細はホームページをご覧ください。



日本とドイツ 文化の違いを乗り越えて

廣江理枝(オルガン)インタビュー

文・聞き手：鴻巣俊博



3月7日の「オルガン・レクチャーコンサート Vol.2 廣江教授の謎解きファイル『タイトルの秘密』」で講師・演奏を務めるオルガニストの廣江理枝さんにインタビューを行い、オルガンとの出会いやドイツ留学で感じた文化の違い、国際コンクールに挑戦した時のことなどを伺いました。

—オルガンとの出会いはいつだったのでしょうか？

オルガンの音を初めて聴いた時のことは鮮明に覚えています。中学・高校は青山学院に通っていたのですが、中学の入学式で講堂の舞台上になにやら大きな鍵盤楽器のようなものが置いてあるな～、と思っていたらそこから凄い音がして…。それはスピーカーから音が出る電子オルガンだったのですが、「何なんだこれは?!」と思った瞬間は忘れられないですね。中学2、3年になると選択授業という形でオルガンを習うことができる時間があり、先生に教わりつつ自己流で一生懸命いろいろな曲を弾きまわりました。高校時代もオルガンは好きでしたが、環境が整わず高校で続けるには至りませんでした。ピアノは前から習っていて、大学は桐朋学園大学のピアノ専攻に進みました。

—一度オルガンから離れたわけですね。再びオルガンに触れたのはいつのことなのでしょう？

大学4年生の頃、きっかけがあってオルガンと再会しました。もうすぐピアノ科を卒業するし、ピアノを続けつつ

趣味でオルガンをやってみようかな～、なんて思ったのが運の尽きで、現在に至ります(笑)。オルガンを再び始めたときにはすでに大学4年生、自分にすぐプレッシャーをかけて急いで練習をしなくては!と思い、ものすごく無理をしているいろいろなことをやってきた感じです。

大学を卒業してすぐに東京藝術大学別科(2年間で実技のみを学ぶ)に入り、その後大学院へと進みました。私が修士1年生になった1990年に水戸芸術館が開館して、藝大の修士課程を修了された室住素子さんが音楽部門の学芸員を務めていらっしゃいました。「プロムナード・コンサート」では演奏する機会を数多くいただき、足しげく水戸に通いました。

—当時の「プロムナード・コンサート」の記録をひもとくと、ほぼ毎週土曜日曜、それぞれ違うオルガニストを迎えて開催していました。数えてみると廣江さんは合計33回水戸芸術館で演奏していらっしゃいました。

水戸芸術館で大オルガンを深夜まで思う存分練習できたことは、学生にとって貴重な経験でした。叶うことなら土日ずっと水戸に居てオルガンを弾いていたいと思っていました。今思い返すとあの頃はオルガンに対する情

熱に燃えていましたね。本当にオルガンが好きだったんだと思います。

—1992年からはドイツにご留学されていますね。ハノーファー音楽大学とシュトゥットガルト音楽大学で学ばれていますが、それぞれどのくらいの期間留学されていたのでしょうか。

ハノーファーには藝大の大学院を休学して留学したので、2年間で帰国しなければなりません。帰国後、大学院を修了してから1995年4月からシュトゥットガルトに渡り、約3年間留学していましたが、そのあと2006年まで11年間ずっとこの街に居残って演奏活動をしていました。今でもあの街は自分の故郷のような感覚があります。

ドイツ南部のシュトゥットガルトはシュヴァーベン地方にあたり、その人々や方言はシュヴェービッシュ(Schwäbisch)と呼ばれています。生粋のシュヴェービッシュの人たちが話していると今でもちょっと分からないぐらい標準ドイツ語とは違う方言なんです。でも私には南部の人たちはおおらかで開放的に感じられました。一方北部のハノーファーは、ホップドイチュ(Hochdeutsch)という標準ドイツ語を話す地域。私が初めて行ったドイツの街だったわけですが、なんとなく人が冷たいな、というところが無きにしもあらずでした。今行くとハノーファーもとても良いところなので、当時は自分の状況も相まってそのように捉えてしまったのかもしれません。

—廣江さんは数々の国際コンクールで輝かしい成績を残されていますね。コンクールを受けた時のことお聞かせください。

全部合わせると10以上のコンクールに参加してきました。なぜそんなにコンクールを受けたのかはよく覚えていないのですが、「人よりオルガンを始めたのが遅いだから人一倍頑張らなくては」、「とにかくコンクールで賞をとらなくちゃ」と当時の私は考えたのだと思います。コンクールは参加年齢の上限を30歳ぐらいに設定しているところが多いのですが、私がドイツに渡ったときにはもう20代後半。残された時間が少ないのでプレッシャーとの闘いでした。コンクールは様々なジャンルの曲を一定のレベルで演奏できる技術が求められるので、いろいろな曲を練習するいい機会になりました。最後に受けたのが1998年、フランスのシャルトル国際オルガンコンクールでした。

——シャルトルは世界で最も権威のあるオルガンコンクールの1つですね。そこで見事アジア人初の優勝という快挙を成し遂げられました！

いろいろなコンクールで賞をいただいたことで、シャルトルも受けてみようと思いたちました。今考えるととても恵まれたことだったと感じています。他のコンクールで残念な結果が続いていたら、シャルトルも受けなかったでしょうから。シャルトルのコンクールでは、表彰式のすぐ後に受賞者演奏があるので、参加者は結果が分かる前にあらかじめ曲を決めておきます。結果発表後、すぐに大聖堂の上の方にある演奏



コンクール本選が行われる
シャルトル大聖堂

台にハアハアと息を切らせながら登って行ったことをよく覚えていています。今はコンクールに審査員として呼ばれる立場になりましたが、過去

にコンクールでコンペティターとして競った奏者が、今は偉い教授になってコンクールの審査員席で再会することもあります。

——留学時代、文化や習慣の違いなどで驚いたことはありますか？

いろいろあったでしょうけど、今は中身がドイツ人みたいになっちゃっているのでなかなか思い出せないですねえ（笑）。あっ、1つ思い出しました！ ハノーファー留学時代、師事していたオルガニストのウルリヒ・ブレムシュテラー先生がやっていらしゃった合唱団に参加していて、その演奏会でのことです。演奏会前に黒い衣装に着替えるわけですが、控室が男女分かれていないのです。異性がいても全く羞恥心もなく、みんな平気で服を脱いで着替え始めたのです。これがドイツなのだな～と思いました。逆に考えると日本の方が特別なかもしれません。大陸の人たちからすると「そんなことが恥ずかしいの？」と思うことが日本人にとっては恥ずかしいこともある。

これを深く考えていくと、日本人がヨーロッパに行って勉強や演奏をする時の問題でもあると思います。日本人が打ち破らなくてはいけない殻のようなものを強く感じましたね。そしていざ殻を打ち破って日本に帰ってくると、それはそれで日本人としてはどうなのかしら、っていうことになる（笑）。ヨーロッパでは当たり前だけど、日本では当たり前ではないことがたくさんあり、藝大で教え始めた後も10年ぐらい葛藤していました。「日本ではこれじゃだめなんだ、日本人にならなくちゃ」って。

——ドイツから帰国後、2006年から東京藝大のオルガン科非常勤講師を務め、1年後には助教授に、2017年には教授に就任されました。さて、今回のオ

ルガン・レクチャーコンサート Vol.2は「廣江教授の謎解きファイル『タイトルの秘密』』と題し、過去2,700回以上にわたる水戸芸術館の「プロムナード・コンサート」の演奏曲目の解析結果を元に、演奏や図解を交えてレクチャーいただきます。どのようなレクチャーコンサートを目指していらっしゃいますか？

なにはともあれ楽しいレクチャーコンサートにしたいと思っています。今までの「プロムナード・コンサート」でよく目にした言葉、例えば“フーガ”とはどういう音楽なのか分からない方、もしくはなんとなく分かっている方もいらっしょんと思います。その「分からない」「なんとなく分かる」を「分かる」に変えられるようなレクチャーを、難しくならないように楽しくお届けしたいです。話は楽しく、演奏は真剣に（笑）。

私が最後に水戸芸術館のオルガン演奏したのは留学から戻ってきた1995年、実に26年前のことでした。これだけの年月を経ると、鍵盤のタッチやパイプの鳴り方にも変化が生じているはずです。水戸のオルガンがどう変わっているのか、それを感じるのも楽しみにしています！

インタビュー全文は当館ウェブサイトに掲載中です。



■公演情報

オルガン・レクチャーコンサート Vol.2
(コーディネーター:室住素子)

廣江教授の謎解きファイル 「タイトルの秘密」

2021.3.7(日)19:00

予定枚数終了

【全席指定】¥3,000

U-25(25歳以下)¥1,000

●講師・演奏 廣江理枝(オルガニスト)

●プログラム

ブルース:コラル幻想曲

〈いざ来ませ、異邦人の救い主〉

J.S.バッハ:前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552

ヴィエルヌ:幻想的小品集 第2組曲 作品53より

トッカータ ほか

INFORMATION

※以下は2月3日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《2.27(土)発売分》

■シリーズ:ベートーヴェン〜時空を超えて〜
ブルーノ=レオナルド・ゲルバー ピアノ・リサイタル
3.28(日) 15:00

■小曾根 真 60th Birthday Solo
OZONE 60 CLASSIC×JAZZ
5.1(土) 17:00

《3.27(土)発売分》

■ちょっとお昼にクラシック
砂川涼子(ソプラノ)(延期公演)
5.21(金) 13:30

2・3月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆塙 美里 サクソフォン・リサイタル
2.28(日) 16:00
料金[全席指定]一般¥3,000/学生(大学生以下)¥2,000

◆今昔雅楽集 三、千代の楽人(出演:伶楽舎)
3.13(土) 16:45プレトーク、17:00開演
料金[全席指定]一般¥3,500/U-25(25歳以下)¥1,000

◆シリーズ:ベートーヴェン〜時空を超えて〜
ブルーノ=レオナルド・ゲルバー ピアノ・リサイタル
3.28(日) 15:00
料金[全席指定]一般¥6,000/U-25(25歳以下)¥2,000

エントランスホール

◆オルガン・レクチャーコンサート Vol.2 予定枚数終了
廣江教授の謎解きファイル「タイトルの秘密」
(講師・演奏:廣江理枝)
3.7(日) 19:00
料金[全席指定]一般¥3,000/U-25(25歳以下)¥1,000

◆市民のためのオルガン講座
実技レッスン受講生による発表会
3.20(土) 13:00 入場無料/要事前予約 ※詳しくはウェブサイトをご覧ください。

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場



野村 萬

◆伝統芸能のススメ[狂言] 萬狂言 水戸公演
『佐渡狐』『茶壺』プレ・パフォーマンス・トーク付き
出演:野村 萬、野村万蔵 ほか
2.20(土) 14:00
料金[全席指定]
S席¥4,500/A席¥4,000/B席¥3,500

現代美術ギャラリー

◆3.11とアーティスト:10年目の想像
2.20(土)~5.9(日)
[休館日]月曜日※ただし5.3(月・祝)は開館
[開場時間]10:00~18:00
※入場は17:30まで
[入場料]
一般¥900/団体(20名以上)¥700
※高校生以下・70歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1名は無料



小森はるか・十瀬夏実(二重のまち/交代地のうたを編む)
2019 ©Komori Haruka + Seo Natsumi



「小澤征爾音楽塾 特別公演2021」開催

2021.3.23(火) 19:00 会場:東京文化会館大ホール
音楽監督:小澤征爾 指揮:ディエゴ・マテウス 管弦楽:小澤征爾音楽塾オーケストラ
チケット(消費税込)S席¥5,000/A席¥3,000/U-25席¥1,500
主催:小澤征爾音楽塾/ヴェローザ・ジャパン
有料配信も予定! 詳しくは小澤征爾音楽塾ホームページ(<https://ozawa-musicacademy.com>)をご覧ください。

2021年2月9日発行(第241号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、石井亮子、高木春佳

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

編集後記

近所の神社でひっそりと引いたおみくじが「凶」でした。…本当に入っているとは。都市伝説かと思っていました。「五月雨にもの皆腐るように気運は落ち込んでいる」そうです。なんとかこの一年を乗り越えられますように。(り)

過去の「プロムナード・コンサート」の記録簿を解析していると、2011年は3月5日で終わり、次のページは2012年の4月28日になっていました。あれからもうすぐ10年。修復されたオルガンは今も力強い音を聴かせてくれています。(満)

青春、朱夏、白秋、玄冬。四季は古来、色と結び付いていたのに、長引くコロナ禍で、全部灰色に塗られたみたいに、季節感が消えた気がします。せめて文化施設は、非日常の空間として生活に彩りを加える存在でありたいです。(篠)

2006年12月に児玉桃さん&小澤さん&MCOが共演した細川さん&モーツァルト作品のCDリリースが決まった。当時は私は舞台袖にいて、もれ聞こえる響きにうっとりしていた。時が止まったかのような感覚。特にK.488の2楽章、ナボリの六度。(て)

自分の車が欲しい!という2020年の目標が、先日叶いました!(年内は無理でしたが…)やっぱり、一つの目標を達成するのは自分の力だけではなく、運やらタイミングやらが重なって達成できるのだなあと、しみじみ…。(春)

「オルガンに触れる日が毎回楽しみで仕方ありません」「50歳で新しいことに挑戦です」など、いつも生き生きしているオルガン講座の生徒さんたち。半年またはそれ以上にわたる情熱の蓄積が、発表会で見事な花を咲かせますように。(樹)

市内の中学1年生をコンサートホールにお招きする「中学生のための音楽鑑賞会」がコロナのために中止となってしまった。中学生という多感な時期に芸術音楽と出会う「一期一会」が失われるという、新しい機会を提供していきたい。(中)

シュトゥットガルトには
ミュンヘンのオクトーバーフェストに
次ぐ規模のビール祭りが
あるらしいよ

